

父子間および母子間のアタッチメントと子どもの発達

本島 優子
(山形大学)

<要 旨>

従来より、アタッチメントを始めとした親子関係の研究の多くは「母子」を対象としたものであり、暗黙裡のうちに子どもの発達に果たす母親の役割や影響の大きさが重視されてきた。本研究では、母子のみならず、父子も対象とすることで、父子間および母子間のアタッチメント関係の様相に迫り、また、父子・母子のアタッチメント関係が子どもの発達にそれぞれ独自にあるいは複合的にどのように影響するのかについて実証的に明らかにすることを目的とする。

乳幼児を持つ父母を対象に調査を行った。子どものアタッチメントの評価として、アタッチメントQソート法を用いて子どもの行動について記述された90枚のカードの分類を父母に求めた。また、子どもの発達の指標として、Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) の日本語版を使用して、子どもの情緒と行動について父母に回答を求めた。

分析の結果、父子間のアタッチメントは母子間のアタッチメントと比べてアタッチメント安定性得点が有意に低かった。また、アタッチメントと子どもの発達との関連性については、父子間のアタッチメントが子どもの向社会的行動と正相関し、母子間のアタッチメント安定性は子どもの向社会的行動と正相関、行為の問題と負相関していた。さらに、父子間と母子間のアタッチメント安定／不安定の組み合わせによって、子どもの向社会的行動や情緒の問題に異なる効果が認められた。母子のアタッチメント関係のみならず、父子のアタッチメント関係もまた、子どもの発達に一定の影響を及ぼしうることが示唆された。

<キーワード>

父親 母親 アタッチメント 発達

【はじめに】

昨今、男性の育児実践が積極的に推奨・推進されており、育児をする父親の姿は一般的なものになりつつある。「イクメン」という言葉がそのことを象徴しており、また学問領域でも、すでに1980年代から子どもの発達に果たす父親の役割の重要性が指摘されてきた（たとえば、Lam & Sagi, 1983）。

しかしながら、本邦における育児に関する研究

の多くは「母親」を対象としたものであり、暗黙裡のうちに子どもの発達における母親の役割や影響の大きさが重視されてきたといえる。一方、「父親」に関しては、母親の研究と比べるとかなり手薄であり、実証研究として行動評定などによる微視的な手法を用いて父親の育児や父子関係の様相を緻密に捉えたものはかなり少ない。

親子の関係性を扱うアタッチメント研究領域

においても、かつては母子間のアタッチメントが重視される傾向にあったといえる。しかし、近年では、子どもは母親以外の大人—父親や祖父母などに対しても、それぞれ独自にアタッチメントを形成していくことがわかっており（園田・北村・遠藤, 2005）、複数の大人とのアタッチメント関係が重視されるようになってきている。そして、この時期における大人とのアタッチメント関係は、後の子どもの社会情緒的発達（Thompson, 2018）の基盤になる。しかし、特に日本においては、父親の育児実践が広く浸透しつつも、父子のアタッチメント関係については未だほとんど検証されておらず、父親に焦点を当てた実証的な研究はかなり限られている。父子間のアタッチメント関係は、母子間のアタッチメントと同様に子どもの発達を予測しうるのか、予測するとすればその強さは母子間のアタッチメントと比べてどの程度なのか、さらには父子間および母子間のアタッチメントの組合せ（たとえば、父母に対して共に安定したアタッチメントである、どちらか片方のみ安定している、両方とも不安定なアタッチメントである）によって子どもの発達への影響は異なるのかなど、多くの疑問が挙げられる。これらを実証的に検証し、追究することは、実証データを踏まえた父親の育児支援のあり方を模索するうえでも、非常に重要であると思われる。

以上を踏まえて、本研究では、乳幼児を持つ家族を対象とし、①父子間のアタッチメントと母子間のアタッチメントの特質に違いはあるのか、②父子間および母子間のアタッチメント関係は子どもの発達にどのように影響するのか、③父子間および母子間のアタッチメントの組合せによって子どもの発達への影響が異なるのかについて、実証的検討を行うことを目的とする。

【方法】

研究協力者

乳幼児を持つ父母 32 組のうち、1 名の父親からは回答が得られなかったため、父親 31 名と母親 32 名を対象とした。子どもの性別の割合は、男児 50.0%、女児 43.8%、不明 6.3%であった。子どもの平均月齢（不明 3 名除く）は、37.45 カ月であった（レンジ=22-57）。

測度

（1）子どものアタッチメント

当初、子どものアタッチメントの測定として、ストレンジ・シチュエーション法の実験手法を用いる予定であった。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の発生に伴い、乳幼児との接触を伴う実験手法の実施は難しいと判断し、より安全に調査を遂行するため、自宅調査の形式を採用し、測定手法を変更することとした。具体的には、Waters & Deane (1985) のアタッチメント Q ソート法を用いて、自宅にて父母それぞれに回答を求め、幼児のアタッチメント安定性についての評価を得ることとした。

子どもの行動について記述された 90 枚のカード（たとえば、「親が頼めば、親と物を分け合ったり、物を渡したりする」）を、「9：とても当てはまる」から「1：まったく当てはまらない」の 9 段階へ 10 枚ずつ仕分ける作業を父母に求め、分類したカードを研究室に返送していただいた。

分析では、各段階に仕分けられたカードにその段階の得点を付与し、たとえば「1：まったく当てはまらない」に仕分けられたカードは、1 点として付与した。そして、あらかじめ複数の専門家によって判断されたもっともアタッチメントが安定している子どもの基準配列得点（Waters, 1995）と、実際の父母の回答で得られた子どもの配列得

点との相関を求め、Fisher の z 変換した値が子どものアタッチメント安定性得点となり、本研究ではこの得点をアタッチメントの指標として用いた。得点が高いほど、専門家が想定したアタッチメントが安定している子どもの行動パターンと近似することになり、アタッチメント安定性の高さを意味する。

(2) 子どもの発達

子どもの情緒や行動の質問紙として、Goodman (1997) の Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) の日本語版を「SDQ 子どもの強さと困難さアンケート」のウェブサイト (<https://ddclinic.jp/SDQ/index.html>) からダウンロードして使用し、父母それぞれに3件法で回答を求めた。「情緒の問題」・「行為の問題」・「多動／不注意」・「仲間関係の問題」・「向社会的な行動」の5つの下位尺度得点を算出した。

なお、1名の父親と1名の母親から回答が得られなかったため、分析対象となったのは父親30名、母親31名であった。また、欠損値があったケースでは、欠損値の項目を含む下位尺度得点は算出しなかった。

手続き

調査資料一式（研究の説明文書、同意書、アタッチメント Q ソート法のカード、SDQ 質問紙など）を同封して、各家庭に郵送した。自宅で父母それぞれに回答していただいた後、同意書とカード、質問紙を返送していただいた。

【結果】

(1) 父子間のアタッチメントと母子間のアタッチメント

父子間のアタッチメント安定性得点の平均値は 0.35、母子間のアタッチメント安定性得点の平

均値は 0.50 であった (Table 1)。 t 検定を行った結果、父子間のアタッチメント安定性得点は、母子間のアタッチメント安定性得点よりも有意に低かった ($t = -2.77, p < .01$)。

Table 1 父子間と母子間のアタッチメント安定性得点の平均値と標準偏差

	父子間 ($N = 31$)	母子間 ($N = 32$)
アタッチメント 安定性得点	0.35 (0.21)	0.50 (0.22)

また、父子間のアタッチメント安定性得点と母子間のアタッチメント安定性得点との相関係数は 0.26 であり、父子と母子のアタッチメント間で有意な関連性は認められなかった ($p = .16$)。

(2) 父子間および母子間のアタッチメントと子どもの発達

子どもの発達の指標として、父母評定の SDQ の下位尺度得点を算出した (Table 2)。父親評定と母親評定による子どもの情緒と行動の得点に有意差は認められなかった。

Table 2 SDQ 下位尺度得点の平均値と標準偏差

	父親評定	母親評定
情緒の問題	6.40 (1.45) $N = 30$	7.03 (1.66) $N = 31$
行為の問題	7.43 (2.00) $N = 30$	7.47 (1.68) $N = 30$
多動／不注意	8.47 (2.22) $N = 30$	8.13 (2.10) $N = 30$
仲間関係の問題	7.21 (1.76) $N = 29$	7.43 (1.96) $N = 30$
向社会的な行動	10.93 (2.33) $N = 30$	11.06 (2.32) $N = 31$

Table 3 父子間のアタッチメント安定性得点と SDQ 下位尺度得点（父親評定）との相関

	情緒の問題 <i>N</i> = 30	行為の問題 <i>N</i> = 30	多動/ 不注意 <i>N</i> = 30	仲間関係の 問題 <i>N</i> = 29	向社会的な 行動 <i>N</i> = 30
父子間のアタッチメント 安定性得点	.02	-.24	-.23	-.11	.40*

* $p < .05$

Table 4 母子間のアタッチメント安定性得点と SDQ 下位尺度得点（母親評定）との相関

	情緒の問題 <i>N</i> = 31	行為の問題 <i>N</i> = 30	多動/ 不注意 <i>N</i> = 30	仲間関係の 問題 <i>N</i> = 30	向社会的な 行動 <i>N</i> = 31
母子間のアタッチメント 安定性得点	.17	-.48**	-.08	.17	.36*

* $p < .05$, ** $p < .01$

次に、父子間および母子間のアタッチメント安定性得点と SDQ の下位尺度得点との相関係数を算出した (Table 3, 4)。父子間のアタッチメント安定性は子どもの向社会的な行動と有意な正相関を示した ($r = .40, p < .05$)。また、母子間のアタッチメント安定性は行為の問題と有意な負相関を示し ($r = -.48, p < .01$)、向社会的な行動と有意な正相関を示した ($r = .36, p < .05$)。

(3) 父子間と母子間のアタッチメントの組み合わせから見た子どもの発達

アタッチメント安定性得点は 0.30 以上で安定したアタッチメントと見なされる (Minde, Minde, & Vogel., 2006)。この基準に従い、父子間と母子間のアタッチメントをそれぞれ安定/不安定に分類し、これらの組み合わせによる子どもの発達への影響について検討した。

まず、父母へのアタッチメントが共に安定している子どもは 58.1%、父へのアタッチメントは安

定しているが、母へのアタッチメントが不安定である子どもは 6.5%、母へのアタッチメントは安定しているが、父へのアタッチメントが不安定である子どもは 22.6%、父母へのアタッチメントが共に不安定である子どもは 12.9%であった (Table 5)。

Table 5 父母へのアタッチメント分類 (安定/不安定) の組み合わせタイプ

	子の割合
父母へのアタッチメントが共に安定	58.1%
父へのアタッチメントが安定/母へのアタッチメントが不安定	6.5%
父へのアタッチメントが不安定/母へのアタッチメントが安定	22.6%
父母へのアタッチメントが共に不安定	12.9%

Table 6 父子間と母子間のアタッチメントの組み合わせから見た子どもの発達
(父親評定の SDQ 下位尺度得点)

	父母へのアタッチメントが共に安定している群	父母いずれかへのアタッチメントが安定している群	父母へのアタッチメントが共に不安定な群
情緒の問題	6.65 (1.58) N= 17	6.22 (1.39) N= 9	5.75 (0.96) N= 4
行為の問題	6.82 (1.74) N= 17	8.22 (1.86) N= 9	8.25 (2.87) N= 4
多動／不注意	8.12 (2.42) N= 17	9.00 (1.73) N= 9	8.75 (2.63) N= 4
仲間関係の問題	7.38 (1.93) N= 16	6.89 (1.62) N= 9	7.25 (1.71) N= 4
向社会的な行動*	11.88 (2.18) N= 17	9.89 (1.83) N= 9	9.25 (2.50) N= 4

* $p < .05$

Table 7 父子間と母子間のアタッチメントの組み合わせから見た子どもの発達
(母親評定の SDQ 下位尺度得点)

	父母へのアタッチメントが共に安定している群	父母いずれかへのアタッチメントが安定している群	父母へのアタッチメントが共に不安定な群
情緒の問題*	7.65 (1.87) N= 17	5.89 (0.93) N= 9	7.00 (0.82) N= 4
行為の問題	6.94 (1.57) N= 16	7.89 (1.90) N= 9	8.75 (0.96) N= 4
多動／不注意	8.25 (2.15) N= 16	8.11 (2.15) N= 9	7.50 (2.52) N= 4
仲間関係の問題	7.81 (2.20) N= 16	6.67 (1.00) N= 9	8.00 (2.58) N= 4
向社会的な行動	11.53 (2.21) N= 17	10.56 (1.81) N= 9	10.00 (3.92) N= 4

* $p < .05$

次に、父子間と母子間のアタッチメント安定／不安定の組み合わせから見た子どもの発達への影響についての検討を行った。父へのアタッチメントは安定しているが、母へのアタッチメントが不安定である子どもは 6.5%のみであることから、

母へのアタッチメントは安定しているが、父へのアタッチメントが不安定である子どもと併せて、父母いずれかへのアタッチメントが安定している子どもの群として合算した。そして、①父母へのアタッチメントが共に安定している子ども、②

父母いずれかへのアタッチメントが安定している子ども、③父母へのアタッチメントが共に不安定な子どもの3群間における子どもの発達(SDQ下位尺度得点)の差異の検討を行った。

一要因分散分析の結果、父親が評定した子どもの向社会的な行動において、父母へのアタッチメントの組み合わせによる主効果が有意であった($F(2,27) = 4.06, p < .05$; Table 6)。Tukeyの多重比較の結果、父母へのアタッチメントが共に安定していた子どもは、父母いずれかへのアタッチメントが安定していた子どもや父母へのアタッチメントが共に不安定であった子どもよりも、父親が評定する向社会的な行動が高い傾向にあった(いずれも $p < .10$)。

同様に、母親が評定した子どもの情緒の問題において、父母へのアタッチメントの組み合わせによる主効果が有意であった($F(2,27) = 3.79, p < .05$; Table 7)。Tukeyの多重比較の結果、父母へのアタッチメントが共に安定していた子どもは、父母いずれかへのアタッチメントが安定していた子どもよりも、母親が評定する情緒の問題が有意に高かった($p < .05$)。

その他のSDQの下位尺度に関しては、父子間と母子間のアタッチメントの組み合わせによる有意差は認められなかった。

【考察】

本研究では、子どものアタッチメントを測定する手法として、アタッチメントQソート法を用いて、子どもの行動が記述された90枚のカードの分類を父母に求めた。その結果、父母それぞれが評価した子どもとのアタッチメント関係は、父子のアタッチメント安定性得点が母子のアタッチメント安定性得点よりも有意に低かった。この差

異は、それが本質的に父子関係、母子関係の根本的な違いを表しているのか、それとも単に多くの家庭において主たる養育的役割をとるのが母親であるということを反映しているにすぎないのか(園田他, 2005)、さらには、父母による評価のためそれぞれの主観的バイアスが入り込んでいるのか、より慎重に追究していくことが必要である。本研究時は、コロナ禍により、大学実験室での観察や実験が困難であったが、今後はアタッチメントQソート法で観察者が子どもの行動を評価したり、ストレンジ・シチュエーション実験で子どもの行動を評価したりするなどして、研究者による客観的なアタッチメントの評価も必要であると思われる。

また、本研究では、父子のアタッチメントと母子のアタッチメント間で有意な関連性は認められなかったことから、子どもは父母それぞれに対して独自のアタッチメントを形成していることが示唆される。欧米圏での研究のメタ分析(van IJzendoorn & De Wolf, 1997)でも、父子間のアタッチメントと母子間のアタッチメントの相関は有意であるが弱かった(.17)ことが報告されている。そのため、子どものアタッチメントの特質は、子どもの特性として(誰に対しても一律に)同質的に形成されていくというよりは、父親や母親などとの個々の関係性に応じて、関係特異的に形成されていくものといえるだろう。

次に、アタッチメントと子どもの発達について、父子間のアタッチメントは子どもの向社会的な行動と、母子間のアタッチメントは子どもの行為の問題および向社会的な行動と有意に関連していた。日本における過去の先行研究においても、母親とのアタッチメントが安定していた子どもは向社会的行動がより高かったことが報告され

ている(近藤, 2020)。本研究では、アタッチメントと向社会的行動との関連性が、母子間のアタッチメントのみならず、父子間のアタッチメントにおいても認められたことから、日本においても父子のアタッチメント関係が子どもの発達に一定の役割を果たしていることが示唆される。母子関係のみならず、父子関係の重要性も示し得た点で、本研究の意義は大きいといえる。ただし、父子と母子のアタッチメントは共に子どもの行動と関連していたものの、母子のアタッチメントは2つの子どもの行動変数と関連していたのに対して、父子のアタッチメントは1つの子どもの行動変数のみとの関連であった。このことから、父子関係の一定の影響は認められるものの、相対的には、母親とのアタッチメント関係の方が子どもの発達とより関連しやすいといえそうである。

また、父子間と母子間のアタッチメント安定／不安定の組み合わせから見た子どもの発達への影響については、父母へのアタッチメントが共に安定している子どもは、父母いずれかのみへのアタッチメントが安定している子どもや父母へのアタッチメントが共に不安定な子どもと比べて、父親が評価した向社会的な行動がより高い傾向にあった。アタッチメントと社会性との関連性についてはこれまでも多くの研究で報告されているが(たとえば、Thompson, 2018)、本研究の新たな知見として、子どもの社会性の発達には、父親と母親へのアタッチメントが共に安定していることが相乗的な効果をもたらす可能性があることが示唆される。そのため、母子関係のみならず、父子関係にも着目して、子どもの発達への累積的效果を検証する視点が有用であると思われる。

ただし、子どもの情緒の問題に関しては、父子、

母子共にアタッチメントが安定している子どもの方が、父母いずれかのみへのアタッチメントが安定している子どもよりも、母親評定の情緒の問題がより多かった。これは予想に反する結果ではあったが、アタッチメントが安定している子どもの方が、安定したアタッチメント関係の中で、自身の(ネガティブな情動も含めて)情動を安心して表出できるためではないかとも考えられる(Sroufe, Fox, & Pancake, 1983)。本研究のサンプル数は小さいこともあり、父子、母子のアタッチメントを組み合わせた複合的な影響については、今後サンプル数を拡大するなどして、さらに詳細な検証を重ねていくことが必要である。

【文献】

- Goodman, R. (1997). The strengths and difficulties questionnaire: A research note. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 38, 581-586.
- 近藤清美 (2020). 1歳児のアタッチメントとその他の発達との関連 日本発達心理学会第31回大会発表論文集, 152.
- Lam, M. E., & Sagi, A. (1983). *Fatherhood and family policy*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Minde, K., Minde, R., & Vogel, W. (2006). Culturally sensitive assessment of attachment in children aged 18-40 months in a South African township. *Infant Mental Health Journal*, 27, 544-558.
- 園田菜摘・北村琴美・遠藤利彦 (2005). 乳幼児期・児童期におけるアタッチメントの広がり連続性 数井みゆき・遠藤利彦(編)アタッチメント: 生涯にわたる絆 (pp. 80-113) ミネルヴァ書房

- Sroufe, L. A., Fox, N. E., & Pancake, V. R. (1983). Attachment and dependency in developmental perspective. *Child Development, 54*, 1615–1627.
- Thompson, R. A. (2018). Early attachment and later development: Reframing the questions. In J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of Attachment: Theory, research, and clinical applications* (3rd ed., pp. 330-348). New York: The Guilford Press.
- van IJzendoorn, M. H., & De Wolf, M.S. (1997). In search of the absent father—Meta-analyses of infant-father attachment: A rejoinder to our discussants. *Child Development, 68*, 604-609.
- Waters, E. (1995). The Attachment Q-Set. In E. Waters, B. E. Vaughn, G. Posada, & K. Kondo-Ikemura (Eds.), *Caregiving, cultural, and cognitive perspectives on secure-base behavior and working models. Monographs of the Society for Research in Child Development, 60*(2-3, Serial No.244), 247-254.
- Waters, E., & Deane, K. E. (1985). Defining and assessing individual differences in attachment relationships: Q-methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development, 50*(1-2, Serial No.209), 41-65.